



16 六千人の命のビザ

●●● 杉原 幸子

ナチス・ドイツによる占領と同時に、ポーランドでもユダヤ人迫害の嵐が吹き荒れていました。のちに悪名高いアウシュビッツ収容所がポーランドの都市クラクフの西に造られたのです。当時、ポーランドには350万人のユダヤ人が住んでいたそうです。その人たちはできる限りの手を尽くしてナチスの魔の手から逃れようとしたのでしょう。運良く逃げのびた人たちは、ドイツの勢力がまだ及んでいないカウナスへ^{たど}辿り着いたのです。日本を通過してアメリカや自由国に逃れる道しか残されていなかったのです。(中略)

その日も朝早く、まだ暗いうちから人々は集まってきていました。夏とはいっても朝夕は寒いくらいで、コートを着ている姿も目立ちます。お互いに話し合うこともなく静かに立っていましたが、その顔には焦燥感が色濃く表れていました。

***夫=杉原千畝**

1900(明治33)年、岐阜県生まれ。第2次世界大戦のさなか、領事館開設を命じられ、赴任したリトアニアの首都カウナスにおいて、ナチスの迫害から逃れるため集まってきたユダヤ人に、日本通過ビザを大量発給した。1940年7月末から8月末までの1か月に発給されたビザによって救われた命は、6,000人とも8,000人ともいわれる。

*夫が表に出て、鉄柵越しに、「ビザを発行する」と告げた時、人々の表情には電気が走ったようでした。一瞬の沈黙と、その後のどよめき。抱き合ってキスし合う姿、天に向かって手を広げ感謝の祈りを^{ささ}捧げる人、子供を抱き上げて喜びを押さえきれない母親。窓から見ている私にも、その喜びが伝わってきました。(中略)

夫は朝食のコーヒーを飲むと、急いで事務所へ下りて行きました。一人一人の応答の後、手書きでビザを書くという作業が始まりました。日本通過のビザを発行するには、受け入れ国の上陸許可証と、日本から目的地まで行けるお金を持っているか、今後準備できる^{めど}目途があるのかどうかを確認しなければならなかったのです。面接を行ってはビザを書くという面倒な作業です。(中略)

翌日も夫は昼食をとりません。朝9時から午後5時までというのが通常の領事館の開館時間でしたが、朝9時に開けると夕方遅くまでビザを書き続けていました。そういう日が何日も続きました。昼食の準備は毎日するのですが、夫が食事をしないと私も心配で食べ物が^{のど}喉を

通りません。かといって、私が手伝えるものでもありません。階段の踊り場ではらはらしながら事務所の様子を窺^{うかが}うのですが、声をかけることもできない状態でした。(中略)



始めの頃^{ころ}、夫は一日に300枚のペースでビザを書くつもりでいました。カウナスの領事館は情報を得るための臨時のもので、ビザの用紙もそう多くはありません。全てを手書きで、しかも一人一人の名前を間違えないように書くという手間のかかる作業です。事務員のグッジェが領事の印を押すのを手伝っていました。グッジェはドイツ系のリトアニア人でしたが、ユダヤ人を助けたいという気持ちは私たちと同じだったのでしょう。夫とともに食事もとらず懸命に働いてくれました。それでも記入するのは夫でなければできません。知らず知らず手にも力が入ってしまいます。万年筆が折れ、ペンにインクをつけて書くという日が続きました。一日が終わると夫はぐったり疲れて、そのままベッドに倒れこむ。痛くて動かなくなった腕を私がマッサージしていると、ほんの数分もたたないうちに眠りこんでしまっている状態でした。(中略)

最初は番号を記しながらビザを発行していた夫でしたが、「こんな丁寧なことをしては、この先とてもさばき切れない」と思ったのです。手間を省くために番号付けを取り止め、所定の手数料の徴収も停止しました。ビザの発行には一件について、当時の日本の価値で、30銭にあたるリトアニア貨幣を手数料として徴収していました。ソ連邦に組み入れられるという状況の中で、リトアニアの銀行が徴収金をドルに変換して東京に送金してくれるかどうか、に不安もあったのです。徴収した分については、リトアニアの国立銀行に依頼して本省の会計課に送金してもらうことができました。

そんな状態が約1か月も続きました。その間、ソ連からの退去命令が数回ありました。実際にはそれ以前の8月2日に、外務省から、“領事館退去命令”が出されていました。それらを見做して夫はビザを書き続けていたのです。もともと身体の丈夫な人でしたが、もうこの

頃には気力だけで書き続けているのが側^{そば}で見ている私にもよく分かりました。1 か月近くも昼食をとらず朝から晩まで休む暇もなかったのです。(中略)

夫は8月28日までビザを出し続けました。ソ連からの退去命令が厳しく、外務省からも「カウナスの領事館を閉鎖し、ただちにベルリンへ行け」という至急電報が届きました。その命令には有無を言わせない強さがありました。夫も私もビザ発行を打ち切るほかに、引き揚げを決意しました。(中略)

私たちは、ホテル・メトロポリスに避難しました。疲れた夫が「休みたい」と言ったからです。そのまま汽車の旅に出ることは、とてもできない様子でした。このホテルにもユダヤ人たちがやってきました。領事館を閉める時に、夫がホテルの名前を貼^はり出しておいたからです。領事印や用紙など公品はまとめて荷作りしてすでにベルリンへ送ってしまっていました。そこで夫は、正式なビザに代わる許可証を発行したのです。ソ連からの勧告ぎりぎりの9月5日まで、私たちはメトロポリスに留^{とど}まりました。後で知った話では、この許可証でもソ連領内を通過し日本に來られたそうです。戦時中のどさくさにまぎれて、それが許されたのでしょう。

私たちをせき立てるように、再度、「リトアニアはソ連領になった。独立国ではなくなったから、すぐ引き揚げろ」という内容の外務省からの電報が届きました。国境が閉ざされてしまえば、国外に脱出することはできなくなります。

9月5日の早朝、カウナス駅でベルリン国際列車を待っている時にも、ビザを求めて何人かの人々が来ていました。汽車が走り出すまで、窓から身を乗り出して夫は許可証を書き続けていました。

汽車が走り出し、夫はもう書くことができなくなりました。

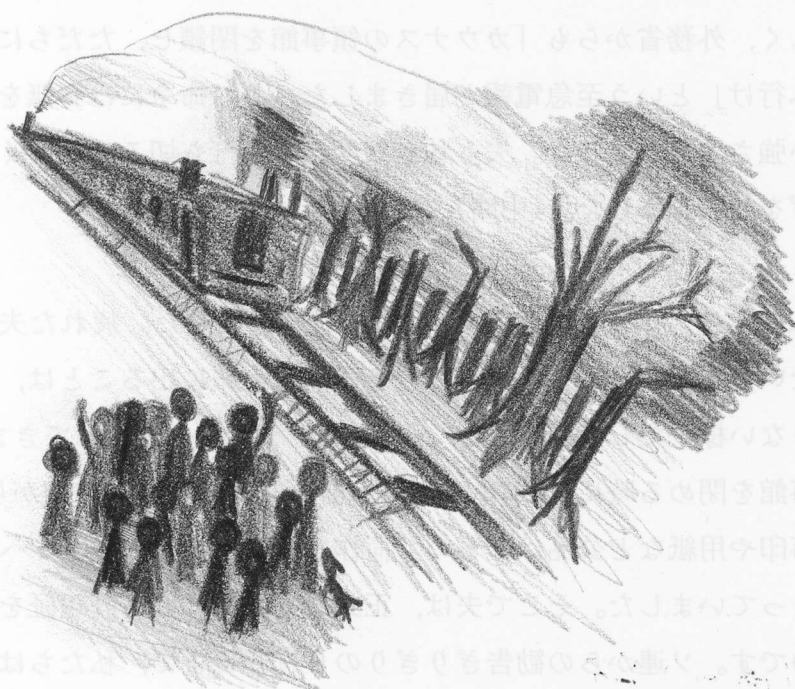
「許してください、私にはもう書けない。みなさんのご無事を祈っています。」

夫は苦しうに言うと、ホームに立つユダヤ人たちに深おかと頭を下げました。茫然^{ぼうぜん}と立ち尽くす人々の顔が、目に焼きついています。

「スギハアラ。私たちはあなたを忘れません。もう一度あなたにお会いしますよ」

列車と並んで泣きながら走ってきた人が、私たちの姿が見えなくなるまで何度も叫び続けていました。

(大正出版「六千人の命のビザ」より)



作者 略歴

杉原 幸子 (すぎはら・ゆきこ)

1913 (大正2) 年、岩手県生まれ。外交官である夫 千畝を助け、ユダヤ人に日本通過ビザを発給することに賛成した。



考えるヒント

- 杉原千畝が、「領事館退去命令」を無視し、昼食もとらず、カウナスを離れるぎりぎりまで、ビザを書き続けたのはなぜでしょう。
- ベルリンに発つ杉原千畝に、「私たちはあなたを忘れません」と言ったユダヤ人の気持ちを想像してみましょう。
- あなたが杉原千畝の立場におかれたらどうするでしょう。